

《コトバ表現シリーズ》

朗読の現状と未来

—— 朗読理論と表現よみ ——

渡
辺
知
明

第1回 「死ぬほど退屈な朗読」というもの

2006年9月、木津川計さんが『上方芸能』に「語りと「二人語り」試論」を書きました。当時、冒頭に書かれた吉川潮さんの「死ぬほど退屈な朗読」という言葉を紹介されたとき、わたしは我が意を得たりと思えました。東京においても同様の現状だったからです。木津川さんの文章からは、「語り芸」のように朗読が独自のおもしろさを持つて発展することへの期待が読みとれました。

これは、東西を問わず、日本全国で現在も続いている重要な課題です。わたしは東京で40年ほどのあいだ、表現よみという考え方から朗読の質的発展のための研究と実践をしてきました。残念ながら、そのあいだに朗読の表現に発展があったとは思いません。そもそも、朗読独自のおもしろさが追究されてこなかったのだと考えています。そこに今後の朗読の発展のための力があると思います。

朗読というのは本を読む手段であるとともに、読み手と聴き手とによるひとつの活動です。その意味で演芸に近いものですから、一つのジャンルとして成り立つ可能性は十分にあります。

ジャンルとなれば朗読界というものも成立するでしょう。しかし、朗読はまだジャンルとして確立されていないのです。

●朗読活動の現状

朗読に関して一般には、朗読という行為そのものよりも、朗読活動の方に関心があるようです。朗読が行われる場が目が向けられます。たとえば、テレビやラジオでは、アナウンサー、ナレーター、俳優、声優などが文学作品を読んでいます。そのほか、朗読の周辺の活動もあります。アナウンス、ナレーション、音訳、語り、読み聞かせ、ラジオドラマ、一人芝居、ポエトリリーディング、ドラマリーディングなどがありますが、それぞれの限られた関心のうちで活動しています。おそらく、ジャンルとしての朗読は意識されていないでしょう。

その一方で、朗読教室に通う人たちが発表会を開いています。また、各地でさまざまな団体や個人が、朗読の教室を開いたり、朗読の発表会を開催したりしています。一般の人たちの朗読会はほとんど無料です。東京でも、お金をとる朗読会を開いているような人たちはごく少数です。朗読が有料でも聞いてもらえるような価値を持つかどうか、そのためには朗読の質が問われます。

また、インターネットの発達によって、若い人たちから高齢の人たちまで、パソコンを利用するようになりました。自らの朗読の録音をパソコンで録音ファイルにしてネットで公開して

います。聴きたいと思う作品をネットで検索すると、名前の知れた文学作品の朗読ならば、ほとんど聞くことができます。ただし、ここも玉石混濁で「死ぬほど退屈な朗読」ではないものを発見するのは困難です。

●朗読理論の必要性

朗読の現状について結論を言うなら、現在の到達点では、朗読が独自の芸術や演芸としては成り立っていないということです。ほとんどの朗読活動が、エンターテインメントとしての魅力を持っていません。その一つの理由は朗読そのものの概念のアイマイさにあります。とくに、朗読のもつ表現の面が意識されていません。今後は表現の面を意識的に探求する必要があります。さまざまな演芸には、歴史があつて、その中で芸として磨かれてきたものです。しかし、朗読は近代日本において始まった歴史の浅いものですから、なおさら理論の助けが必要なのです。

朗読の理論がないために、それぞれの実践者は、自らの出身ジャンルの方法を朗読に応用しています。アナウンサーは放送のアナウンス、俳優は演劇の舞台やテレビドラマ、声優はラジオドラマやアニメーションの仕事の延長で朗読をしています。演技力のある俳優であっても、いざ朗読となると、作品の表現をせずに読み上げてしまう傾向が一般的です。

その原因としては、小説や物語を文学作品として読むという観点がないことがあります。作品を台本として読んでしまうのです。つまり、セリフとト書きとに分けて、セリフを際立ててト書きはナレーションにするという読み方になっています。

朗読は文学作品を読むものです。しかし、「読み」と一言に言っても何を読むかによって、いわばその目的は定まります。放送原稿ならばアナウンス、コマーシャルメッセージならばナレーション、新聞記事ならば報道のためというようにテキストが読みを決定します。本来の朗読は、詩や小説や物語などの文学作品がテキストです。それは虚構の世界を創造するものであり、読み手は読み声による作品の世界を創造するのです。

あえて東日本の朗読活動の現状をまとめるならば、それぞれが独立した分野において「朗読」というアイマイな概念のもとで、それぞれの人たちが、それぞれの方法で声の表現の試みを続けているということになります。残念ながら、まだ、「死ぬほど退屈な朗読」から脱する表現のできる読み手は非常に少ないのだといえます。

第2回 「朗読」というものの意味

近ごろ、朗読がブームだと言われていますが、朗読とは、どのようなものだと考えられているのでしょうか。それぞれの朗読活動の背景には、たとえアイマイであっても、朗読についての考えがあります。今後、朗読の文化を発展させる方向を探るために、朗読についての一般的な考えを検討してみましよう。

●「朗読」の定義

国語辞典には朗読の意味が書かれています。たとえば、「声をあげて詩歌や文章をよむこと」、「声高く読み上げること。特に、読み方を工夫して趣あるように読むこと」とあります。この要点は3つです。①声に出して読むこと、つまり音読すること、②「詩歌や文章」などの文学作品を読むこと、③その内容を「趣あるように」読むことです。

ここに朗読の原点があります。注意したいのは、よく言われる「人に伝える」ことが中心なわけではありません。それが優先されると、朗読がアナウンスやナレーションと同一に考えられがちです。また、単純な音読とまでされる傾向もあります。最近では、「裁判官が判決文を朗読する」などと使われるほどです。

声に出して読むことの原点は、読み手による理解にありました。かつて、文章は声に出して読むことで理解するものでした。江戸時代に寺子屋や藩校などで行なわれた素読の方法です。人に聞かせるためではなく、自らが書物の内容を理解するための手段でした。

●朗読の歴史

明治時代に朗読という言葉が生まれてから新たな意味を持ちます。朗読の研究の始まりは、学校での読み方の教育や、演劇における声の表現法などでした。文学者の坪内逍遙も文学や演劇との関係で総合的に朗読の方法について検討しています。それ以後は、おもに2つの方向から研究されるようになります。

第1は、学校における国語教育や読書指導の方法として実践的に研究されました。朗読は、言語教育の一環として、文章の読解や文学作品の解釈という課題と結びついていました。第2は、大正14年（1925）ラジオ放送の開始によって始まった朗読の研究です。朗読はラジオ放送のための声による情報伝達という性質を持つことになります。

戦後には、第3の朗読の研究が始まります。目の不自由な人に声で書物を提供するものです。それまでは、文字を音の一字ごとの点字に訳す「点訳」でした。音声訳が始まったのは昭和33年（1958）です。テープレコーダーの普及により、文字の代わりに声で書物を提供できるだろうという考えでした。

これがボランティアによって広く普及して、朗読イコール音訳というのが社会的な通念となりました。「朗読の勉強をしています」というと、「眼の見えない方に録音するのですね」と言われるものです。

以上のような考えかたを基礎にして、現代の朗読の考えが成り立っています。とくに朗読の観念として普及しているのは、放送のための朗読と目の不自由な人のための朗読という考えかたです。その一方で弱いのは、理解や表現としての朗読という考えかたです。しかし、朗読のブームを支えているのは、むしろこちらの面です。多くのひとが朗読に感じるおもしろさは、表現としての朗読の性質にあるのです。

●戦後の朗読活動

戦後から現代までの朗読の活動の流れを大まかにたどってみましょう。戦後、昭和29年（1954）に、全国の高校の放送部員を対象にしたNHK放送コンテストが始まります。その朗読部門が、放送のための朗読という現代の考えかたの底流となっています。

1970年代には、音声訳で学んだ技術を基礎にして朗読の活動をする団体が、日本各地に増えてきます。そして、2001年には、朗読するための本と銘打ったベストセラーが出ます。それをきっかけに、朗読活動をする組織がつくられます。その後も、NPOとして設立された団体がいくつかあります。

その過程では、一般の人たちを対象にした朗読のコンテストも開催されました。1982年に、洋菓子会社が始めた詩の朗読のコンテストは現在も続けられています。それから、今までいろいろなコンテストが開催されていますが、それぞれのコンテストの評価は審査員の朗読の観念に大きく左右されます。多くの場合、審査員は、アナウンサーやナレーターですから、放送のための朗読という評価になりがちです。

しかし、中には表現としての朗読を評価するコンテストもありました。インターネットの朗読サイト主催で行なわれたコンテストでは、作品の表現を重視した独自の評価で読み手を選考しています。また、言語理論を研究する団体による文学作品のよみのコンテストも開催されました。そこからは、今でも表現としての朗読を探求している読み手が何人も発掘されています。

わたしは、声の文化として朗読が発展するカギは、表現としての朗読への意識転換にあると考えています。それが、「死ぬほど退屈な朗読」から脱する第一歩となるでしょう。

第3回 朗読をどのように定義するか

●朗読とは何か？

そもそも朗読とは何なのでしょうか。ここで、あらためて考えてみましょう。この点がアイマイでは、今後、朗読の活動をどのようにすすめてよいのか見当がつきません。朗読というものが何であるのか、その意味が分かれれば、次のようなことがハッキリします。

第1、さまざまな芸術や演芸のなかで、朗読の占める位置です。他の分野との共通性とちがいが見えてきます。そうなると、朗読の持ち場と発展の方向とが見えてきます。

第2、朗読をどのように評価するかという基準です。いい朗読とはどのようなものか、どこをどのように評価するかという点です。それは朗読の学びかたにつながります。

第3、朗読の今後の発展方向です。わたしが期待するのは、聞き手が退屈しない朗読、聞き手が楽しめる朗読です。朗読というもののおもしろさの追究の仕方です。

●「朗読」の意味

今、朗読とは、どのように考えられているのでしょうか。わたしの直感で世間のイメージをいうならば、放送で耳にするアナウンサーや俳優・声優の読みが8割、音声訳や読み聞かせが

2割です。

ところが、いくつかの国語辞典の定義をまとめてみると、次のような意味になります。

「おもに文学作品、詩や小説などを、声に出して趣（おもむき）あるように読んで、味わったり鑑賞すること」

ここで定義された朗読の要点は4つあります。

①声に出して読む——声に出して本を読むことを音読といいます。朗読は音読の一種です。また、必ず読むべきテキストがあります。テキストがなければ、暗唱か、語りか、演技です。

②文学作品を読む——朗読のテキストは文学作品、おもに詩や小説や物語などです。戯曲は読むものではなく、演じられるものです。ニュースなど情報伝達の原稿は、アナウンスやナレーションのためのものです。

③読み方に工夫がある——文章の情報を伝えるのはアナウンスです。朗読は、文章を機械的に読み上げるものではありません。文学作品の内容を表現するための工夫があります。朗読の目標は、文学作品の「趣（おもむき）」です。

④作品を味わう・鑑賞する——朗読の目的は、作品を「味わう」ことや「鑑賞する」ことです。朗読には読み手と聞き手とがあります。読み手は、作品を味わいつつ「趣（おもむき）」を声に表現し、聞き手は、その声によって作品を鑑賞するのです。

●朗読のおもしろさとは何か

それでは、朗読でしか味わえない魅力とは何でしょうか。読み手と聞き手と、それぞれの立場から考えてみましょう。読み手にとって、朗読は読書です。声に出して読めば、文学作品をより深く理解して味わえます。さらに、だれかに聞いてもらえるなら、表現者としての楽しみが加わります。

聞き手は、声で表現された作品を聞いて楽しむことができます。読み手の声によって表現された作品の世界が、聞き手の想像に浮かんでくるのです。つまり、朗読ならではの「おもしろさ」というのは、読み手と聞き手が、文学作品の世界を共有して味わうことにあるのです。

朗読を聞くときには、声のほかには頼りにするものがありません。舞台装置や照明や衣裳や小道具などは、朗読にとっては二次的なものです。朗読のおもしろさは、文章に表現された文学作品の内容を声によって現実化するところにあります。それが文学作品の声による表現のおもしろさなのです。

●文字のことばと声のことば

朗読は、文章に書かれた文学作品を読むという点で、一般の読書にもっとも近いものです。ですから、もとの作品そのものがおもしろいかどうか重要です。朗読において、作品選びが大切だということの根拠がそこにあります。

ただし、文学作品を読んでその内容を理解するのはなかなかむずかしいことです。それで、朗読をおもしろくするつもりで、つい本道ではない工夫をしがちです。文章を暗記してお芝居をしたり、小説を台本にして演劇にしたり、派手な衣裳を着て演じたり、音楽や照明や映像を添えて聞き手の想像力を補ったりするのです。

しかし、何よりも重要なのは、朗読が文字の表現と声の表現を媒介するものであるという点にあります。読み手は、文字に書かれた文学作品を読んで理解し、聞き手は、読み手の表現する声から、作品の世界を想像するのです。文字で書かれた作品であるならば、すべてが朗読の表現の対象になります。それが文学作品の音声化なのです。つまり、朗読とは、ことばを手段とするあらゆる芸術や芸能の基礎となる可能性を秘めているものなのです。

第4回 聞いて楽しめる朗読の方法

今回で連載は終了です。最後に、聞く人が楽しめるような朗読をするにはどうしたらいいか、その基本から考えてみることにします。

●朗読の楽しみとは？

読み手にとっては、朗読とは無条件に楽しいものです。文学作品を声に出して読むことよって、作品がより深く味わえるからです。また、聞き手の注目を浴びながら、自分自身をアピールできるという喜びもあります。

しかし、聞き手にとっては、どんな朗読でもいいというわけではありません。作品のすじを知るだけではなく、朗読を聞きながら心ときめくような体験をしたいものです。

朗読を聞く楽しみは、歌や演劇や落語や講談や義太夫などと似ているところがあります。しかし、朗読には朗読独自の表現としての魅力があります。それは、読書にもっとも近いかたちで、文学の世界を朗読作品として味わえるところです。

しかし、まだ読み手には、朗読作品の表現者だという自覚が欠けています。何よりも重要なのは、声による表現として朗読を磨いていくことです。そこで、表現を意識した朗読法の要点を示しておくことにしました。（詳細については、拙著『朗読の教科書』をご参照ください）

●「朗読作品」のつくり方

①作品を表現する——朗読とは文学作品を素材にした表現です。読み聞かせでも、アナウンスでも、ナレーションでもありません。聞き手に文章を正確に伝えようとするから、緊張して固くなるのです。一文ごとに自分が何を言っているのか自分の声で確かめながら読むのです。一文ごとの読みを反省しながら、次の文の読み方につなげます。それが表現になります。読み手の表現がまとまって行くなら、誤読があっても発音が悪くても、たいした問題ではありません。読み手自身が楽しんでる読みかたは、聞き手にとっても楽しいのです。

②姿勢と動き——読み手の態度は姿勢にあらわれます。読み手が緊張していたら聞き手も同じように緊張します。背筋を伸ばして、身じろぎもしないような姿勢では声が出ません。立つても腰かけても、いつでも自由に動けるような姿勢をとります。両肩と上半身の力を抜いて、上体の重みを後ろ腰で支えます。立つのなら、足踏みして歌を歌えるような姿勢、腰かけるのなら、つま先をつけて立ち上がれる姿勢です。作品の展開とともに読み手の感情は変化します。それとともに顔の表情も変わるし、からだもゆれ動いてしまうのが自然なのです。

③声と発声——声は、腹式呼吸ではなく、腹式発声で出ます。声は「①息、②のど、③舌、

④「口」を通じて外に出て、周囲の「⑤空気」を響かせます。とくに重要なのが、息のコントロールと声帯の振動です。表現のための声は、マイクを使わなくても響く声です。声の大きさではなく、息でコントロールされて安定した強い声です。「ブー、ハー、シー」の3通りの発声訓練で鍛えられます。また、地声とウラ声とを切り替える声が使えらるなら表現力が高まります。とくに、力あるウラ声によって感情の高まりが表現できます。

④日本語リズムとアクセント——表現の本質は強さです。強弱のリズムによって生き生きした感情が表現されます。ことばのながれにも音楽と同じリズムがあります。日本語のリズムは、2音3音区切りごとにつけられる強アクセントで生まれます。強アクセントの位置は、2音ならば前か後、3音ならば前か中か後のいずれかです。文のながれでは、2拍子と3拍子のリズムとが入り混じっています。強アクセントは、息をコントロールできる姿勢と発声から生まれます。アクセントのリズムが、からだの動きによって感情と一体化した表現になります。

⑤文構造とイントネーション——文学作品は文ごとに意味を持ちます。文の意味とは、主部・述部の関係、修飾・被修飾の関係を声に表現したものです。その関係も強アクセントのつけ方で示されます。語句と語句とのイントネーション関係も、語句の意味を強調するプロミネンスも、強アクセントによるものです。文中の語句のまとまりは、頭が強く先のとがったくさび形のかたちのイメージになります。

●「語り口」と作品選び

以上が、聞き手に楽しんでもらえるための声の表現の基礎です。さらに、それぞれの作品の特徴を生かすという課題があります。文学作品には「語り手」によって定まる「語り口」があります。物語や昔話のほかに、落語や講談のような語り芸の口調を生かした文体もあります。それらの特徴を生かして表現することで朗読作品もおもしろくなります。

すぐにでも、おもしろい朗読をしたいという人には「笑い」のある作品を取り上げることをお勧めします。例えば、夏目漱石「吾輩は猫である」などは、笑いの表現の楽しさとむずかしさを知るうえでいい勉強になります。(完)

わたなべ・ともあき＝日本コトバの会事務局長・講師、コトバ表現研究所・所長。著書『朗読の教科書』2012。『表現よみとは何か』1995。ホームページ＝<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>

※この小冊子は、2013年1月7日から9月14日まで、『関西語りの広場』（発行＝関西朗読コンテスト）に4回連載した記事に最小限の加筆をしてまとめたものである。

朗読の現状と未来

—朗読理論と表現よみ—

2013年10月6日 第1刷

著者 渡辺知明

発行者 コトバ表現研究所

発行所 品川区東五反田2-15-6-515

〒141-0022 電話&FAX. 03-3445-6499

w-tomo@tokyo.email.ne.jp

<http://www.ne.jp/asahi/kotoba/tomo/>